

南東ヨーロッパの歴史教育と平和教育

共産主義政権の崩壊後、過去認識および歴史記述が改訂された。バルカン半島諸国の歴史の修正は歴史編集の主要な変化だけでなく集合的な自己認識の変化を反映したものである。他方では、ユーゴスラビア戦争(1991~)は歴史教育への西側の関心と介入を誘発した。欧州審議会(CE)、教員協会、EUおよび西側の諸政府、安定協定、NGOは歴史教育の修正プロジェクトを作りあげた。この活動はすべて、国家主義者の対立で分裂させられた地域の中で、和解のツールとして歴史教育が有用であるという確信に基づいていた。したがって、歴史教育は南東ヨーロッパでの平和教育の中心的なプロジェクトの一部と見なされた。

この報告で、私は、南東ヨーロッパの歴史修正の異なるレベルを分析する一地域の「内部」と「外部」で一、つまり、2つの世界大戦後の平和教育プロジェクトの国際的な伝統、西洋の介在の政治文化である。それらは南東ヨーロッパの歴史教育の修正のプロセスを支えると同時に、バルカン半島の社会からの反発をもたらした。

1. 南東ヨーロッパ史の修正

1.1. 歴史教育の修正

南東ヨーロッパ(SEE)で歴史を修正することは1989年以降にスタートし、次の事項にも関連したプロセスであった：

- (1) 地域史(特に1989年の後の)としてのヨーロッパ史の一新；
- (2) 1989年以降のバルカン半島の諸国史の修正；
- (3) ヨーロッパ(西側と東側)の歴史教育の修正。

ヨーロッパ史の記述は、すなわちヨーロッパの統合のプロセスの、政治的に発展的なものであった。多くの歴史家が、共通のヨーロッパ文明の記述を目指して、ヨーロッパの過去を考察した。しかしながら、冷戦の終了によって作られた劇的な変化は、まさにヨーロッパアイデンティティに影響し、ヨーロッパ史の修正をもたらした。「ヨーロッパとは何か?」という疑問はヨーロッパの過去の1つの不動な解釈を示唆していた。しかし、この質問に対する答えは明白ではなかった。90年代以前のヨーロッパ史は「排他的で」、主に大陸の西側のみに言及したが、90年代以降、西側と東側を歴史的連続として両者を統合する「内包的」試みが行われてきた。しかしながら、東側と西側の間の緊迫は消えてはおらず、また私たちは西側の諸論文の中に、東欧文化の「業績」に対する見下した(隠された不十分な)評価に気づくであろう。

前共産主義のバルカン半島の国々では、1989年以降の歴史編集の修正は歴史の「脱イデオロギー化」、つまりマルクス主義的解釈を除去し、あるいは共産主義体制時を忘却また

は拒絶の括弧に入れる手続きであった。バルカン半島の諸国史の修正は一貫しておらず、むしろ矛盾している過程が多く続いた。歴史記述の有効性および客観性を疑問視するポスト・モダンの研究が、国内の教条的な国家主義的歴史観と共に出現してきた。(Brunnbauer 2004)

1.2. 世界大戦からの教訓

歴史教育の修正は多種多様の過程で試みられた：一方では歴史教育の目的と方法の一新であり、他方では世界戦争と民族間での対立の不快な影響についてであった。平和教育は、歴史教科書の修正の主な目的のうちの1つであった。ユネスコ憲章の前文の第一節によれば(ラフォンテーヌ=シュワルツ 2005: 3)

戦争は人の心の中で始まるので、平和の防御物が構築されなければならないのは人の心の中においてである。

第一次世界大戦の後、1925年には、国際連盟が、教科書の比較分析および修正を推奨した。その一方で1937年には、26国家が「歴史教育(学校教科書の修正)に関する宣言」に署名した。第二次世界大戦の後、1946年には、ユネスコは「教科書および国際的理解を深めることの教材の改善計画」を発展させた。また、1949年には、「国際理解の補助としての教科書と教材の改良用ハンドブック」を公表した。(Pingel 1999: 9-17)欧州審議会もまた1953年以来同じ方向で活動した。(ストバート 1999)最後に、1951年に設立されたゲオルグ・エッカート国際教科書研究所はユネスコや欧州審議会と協力しながら、教科書分析および修正の目標を設定した。そのニューズレター「Internationale Schulbuchforschung」では、教科書研究についての多くの情報を見ることができる。

したがって、既に1920年代に、その後1940年代に、教科書は20世紀の戦争に対して大旨「有罪」と判断された。隣人に対する否定のステレオタイプ(それらは特に歴史教科書に含まれているもの)が、世界大戦の原因のうちの1つであると確認された。学校が戦争に責任を負っていることも等しく発見された。こうして、他の民族に対する否定のステレオタイプおよび偏見を根絶するために教科書を修正する必要があると考えられた。また、このために多くの努力が、ヨーロッパでなされた。(例えばフランスおよびドイツと、ドイツおよびポーランドとの間で等)

歴史のイデオロギー的、政治的な利用—特に学校での歴史教育の中で—は、19~20世紀のすべてのヨーロッパ諸国に共通する特徴であった。バルカン半島の国々もその例外ではなかった。南東ヨーロッパのほとんどの教科書に、私たちは、隣人に対する否定的、対立的な態度を生む表現や句を見つけるかもしれない。従って、教科書内容とナショナリズムの高揚、その極端な明示は武力紛争であるが、その間にはより直接であろうと無かろうと、何らかの関係がある。暴力とナショナリズムの高揚は、過去15年間にバルカン諸国の文化的単一性についての古い西側のステレオタイプを再び思い起こさせた。それは教科書に反映されていると考えられた。(Koulouri 2002)

最近の20年間で、歴史教育の修正は2国間の、あるいは多国間の/地方の、そして国際プロジェクトを通して促進された。これらのプロジェクトは、ステレオタイプおよび近隣者たちの対立的な姿勢を除去することを目指し、教科書分析と材料そして教員教育を含ん

ていた。それらは、NGOによって、あるいはユネスコと欧州審議会のような国際組織によって始められた。それは政府間を協力させ、結局教育政策に影響を及ぼした。

1.3. 地域安定のツールとしての歴史教科書

政治評論家と研究者が、バルカン諸国での最近の民族間の対立および暴力の多様な原因を調べようとした。その原因を認識し記述することによって地域の紛争予防や安定化の手段を設計することができた。学校の歴史教科書は、異なる国家や民族のコミュニティ間の対立や不寛容の潜在的な原因のうちの1つになっていると確認された。

バルカン半島地域の最近の研究計画や出版物は、教科書から「対立をつくり出す」国家的ステレオタイプの除去の可能性を調査した。この活動の根本的な仮定は、歴史の指導方法の変化が近隣の人々の相互理解に、長期的には有効であるかもしれないということである。教科書の改良は、長期的な信頼を醸成する措置—和解用のツール、として機能するかもしれない。従って、歴史の記述と教育のこの発想の究極の目標は、民主主義的市民権、寛容および相互理解を促進することである。

最近の「バルカン戦争(1912-3)」の後に、より強制的に、歴史教科書の内容変更の必要性が理解された。この変更は、否定的なステレオタイプを除去し、およびバルカン半島の歴史の共有部分を強調すべきであった。学校は、ともに平穏に生きるライバル国家の民主国家の市民を教育すべきであって、潜在的な兵士を養成することではない。従って、教育改革は西側と各国家の両者によって支持され、地域の安定化および和解を意図して行われた。これらのイニシアチブは国際的介入の点からも理解される。

2. 対立後のバルカン諸国の国際的介入

2.1. 介入のタイプ

バルカン諸国と外部世界の間には存在するパワーの不均衡は、介入の可能性をもたらしている。バルカン半島の国民国家の設立以来のSEEへの国際的介入を概観してみよう。WWII後のトルーマンドクトリン(1947)は、「武装した少数によるあるいは外圧による征服に抵抗している自由民」(Lampe 2006: 13)を支えるために世界の至るところで介入することを誓いながら、介入の政治的なイデオロギーを確立した。しかしながら冷戦中、1948のチトーとスターリンの分離後、確立された非同盟運動は不干渉の原則を擁護した。

1989年後の東ヨーロッパは、多党制民主主義や自由市場経済など、西側のモデルを採用した。1990年と1995年間のユーゴスラビアの分解は共産主義政権崩壊の劇的な様相だった。ユーゴスラビア戦争中に、西側の政策は、第1に戦争を止めさせ、第2に国境の少数民族の人権を保護することであった。このことは、欧州人権裁判所の設立で2001年で最高潮に達した。

デイトン合意(1995年11月に署名)は「戦争の終了を記したが、しかし平和の始まりだけを示した」(ICB 2005:3)。実際に、ユーゴスラビア戦争後、国際的な(監視団体の)存在は、バルカン諸国—特にボスニアとコソボ—で特に強化された。国際的介入は地域安定

に向けて、異なるレベルで、および異なる様相で示された。安定化を達成する戦略は、バルカン半島の個々の国で多様に推進された。その結果、バルカン半島の国々は異なるグループ例えば西欧バルカンに分類され、また、地域の新しい **balkanization** (小国分割) が出現した。さらに、小国分割は2種類の国際的介入によって増強された：承認と軍事介入。

▶安定はユーゴスラビアの解散から出現した一連の国家の承認。かくて、承認は介入の一方の重要な手段となった。(Siani-Davis2007: 17)

▶軍事介入は、ユーゴスラビア(1999)への NATO 爆撃キャンペーンとコソボとボスニアへの西側の軍隊の存在で証明された。

その地域での新たな国家の創造と国際的介入が、小国分割をもたらしたとするならば、地域協力は少なくとも象徴的なレベルでは、全く逆の展開を示した。ヨーロッパの統合の展望は同じ方向へ導いている。1996年以來、EU(欧州連合)の拡大の文脈の中で、EUへのバルカン諸国の統合は、実際に新しい集合体を形成した。それはSEEの境界上にも及んでいる。ヨーロッパ性はバルカン性を飲み込んでいる。

2.2. 小国分割に対するヨーロッパ化

従って、地域協力は小国分割の象徴的な逆説である。言いかえれば、ヨーロッパ化は小国分割の対極であり、それを克服するただ一つの展望である。「ヨーロッパ統合」の考え方は、「国際的介入」の考え方に代わった。この思考は「バルカン半島の諸国家は相互依存し、地理学的に接触するエリアの問題は必ずEUに影響するという信念」(Siani-Davies2007:172)に基づいている。その上、ヨーロッパは、バルカン諸国に避けられない同義上かつ安全保障を有していると考えられてきた。(ICB 2005: 6)

共通なヨーロッパアイデンティティは、共通の市民権の感覚を通して、バルカン諸国の統一の手段として広められている。ジュリアーノ・アマトを議長として18人のメンバーを含んだ、バルカン諸国に関する国際調査委員会が2005年の報告書の中で、「EUがバルカン諸国で直面している実際の選択は：拡張かあるいは帝国か」である(ICB 2005: 11)と述べていることは注目に値する。弱小国家の政治情勢およびコソボやボスニア準保護国はバルカン諸国での新帝国主義の危険性を私たちに警告している。

2.3. 安定協定

1999年に調印された安定協定は、その地域のEU統合への展望を支えた。南東ヨーロッパ用の安定協定は、その地域の再建および安定化を意図してドイツの提案で確立されたものである。教育は民主化と平和を保証する手段として、公式議題になった。このプロセスの最終の目的はこの地域の将来のEUへの統合であった。ヨーロッパのこの精神地図は、恐らく次のような理由による。つまり、「バルカン諸国」という用語は、その全ての否定的な含蓄故に、安定協定交渉の間は慎重に回避され、代わりに「南東ヨーロッパ」が使用された。(Lafontaine-Schwarz2005:18)対立後のバルカン諸国の再建のプロセスは、西側の心性に何世紀にもわたって存在して来たこの地域へのステレオタイプの思考によって影響を

受けた。

例えば：バルカン諸国に関する国際調査委員会の報告書(1996)によれば、 Dayton 合意後の国際社会の役割は「過去の、よく知られた無秩序で血なまぐさく不穏なバルカン諸国を、将来は安定した平和で信頼できる南東ヨーロッパに転換するのを支援する」事である。(ICB 2005: 3)

2.4. NGO(非政府組織)：グローバルな政策の新しい活動要因

「介入」の考え方は政府・政府間の国際的な活動要因を意味するが、SEE の Dayton 合意後の再建や安定化は NGO の活動に著しく依存した。この活動が促進されたのには少なくとも 2 つの理由がある：第 1 は、バルカン諸国の市民社会強化へ向けて国際社会も重視したこと、第 2 に NGO が地域コミュニティの貧困な人々に柔軟で、効率的に活動できると考えられたからである。国際諸組織は、民主化と平和のための本質的な先行条件として市民団体の強化を考えていた。

国家管理の数十年間後に、多くの NGO がポスト共産主義のバルカン諸国に出現した。しかしながら、多くの NGO は必ずしも強い市民団体を意味しない。ボスニアでは、例えば、西側の「専門家たち」のグループが市民団体の価値を広めるために働いたが、実際に、国際的な NGO の活動はローカルの NGO の発展を妨害してきた。ローカルの NGO は、国際的な NGO に財政的に依存し、clientelist ネットワーク(依存主義?：訳者)のみが発展した。新たな西側主導、英語を話すエリートは、国際社会と地域社会の間の仲裁人の役割を果たしながら、古い社会主義の官僚にとって代わってきている。

この地域の世論調査は、低レベルの大衆参加と同様に地域社会の NGO に関しても広範囲の懐疑心を示した。大衆の悲観主義、不満および不信の拡大傾向もまた、同じ期間にバルカン諸国で行われた国際調査委員会の研究でも示された。

3. 歴史教育と平和教育へ介入

3.1. ポスト矛盾するバルカン諸国の教育改革

歴史記述および歴史教育への介入は、平和教育と和解の分野で実現した。西側の教科書修正の経験は、バルカン諸国での教育改革のモデルを励起するうえで、地域安定の目的と結び付けられた。教育および歴史教育の分野で、西側のカリキュラムおよび教科書は、モデルとして使用された。

教育改革は、国際的かつ国内的諸機関の共同作業を必要としたが、明らかにそれらの関係はバランスがとれたものではなかった。モデルの開発は西側の諸機関によってコントロールされ、現実状況の生のよい情報はほとんど知らされなかった。これは、語学的な不調性と間接的情報を広範囲に活用したことによる必然的なものであった。示唆された改革は、前の教育制度を全面的に排除し、ゼロからの出発であった：教育は、排他的に西側のモデルに基づき、その内容、目的および方法が改良されるべきであった。国際社会によって設計された改革が、ローカル文化を「非ヨーロッパ」として拒絶したことが、これまでの教

育改革が旨く行かなかった理由であると、私は考えている。しかしながら、推移の立案は少なくともバルカン西部では、共産主義時代と対立時代の2つの遺産を考慮に入れるべきである。

3.2. 対立と平和教育

異なる教育計画のモデルが、対立のタイプや状況に対応して開発されてきた。対立前の社会不安の状況では、教育計画は対立予防を目指すべきである。対立後には、それらは社会再建と重要な開発に寄与するべきである。

対立後の状況の中で、平和教育は永続する平和を確立するための先行条件であるということである。Enhanced Graz Processは、応用的な平和教育の例を提示している。オーストリア(EUの大統領職)によって始められて、それは、安定協定の「教育および青年」領域の調整者になった。実際、教育改革の主な機関は安定協定であった。

安定協定によって作成されたドキュメントによれば、歴史教育は、次の議論と共に平和教育の中心に置かれている：

- ・第1に、SEE 史の国々で、歴史は曲解され、特別のアイデンティティやイデオロギーを促進するために使用されてきた。
- ・第2に、その歴史教育は、マルクス主義的解釈と周辺国と少数民族の歴史に対して批判的に改訂されるべきである。

3.3. 平和教育の一部としての歴史教えること

既に言及したように国際的レベルでは、歴史教育と教科書の修正は対立によって衝撃を受けたか脅かされた社会の平和を保障すると考えられている。SEEつまりナショナリズムを「疑う」地域で、歴史の修正は和解プロセスに結合された。和解は、近隣諸国との平等関係、国家内の多数派と少数派の関係に関わった。更に、和解の「方言 dialect」は、民主主義的市民権、社会再建、相互理解、寛容、安定などのようなキーワードで構成された。

3.4. 小国分割に対する共通のバルカン半島史

地域協力に基づいて、歴史教育に関する主要な企画は、共通のバルカン半島史の執筆に向けられた。地域の成長しつつある小国分割への対応として、共通のバルカン半島史が取り上げられた。特に、前ユーゴスラビアでは、歴史上の事実として彼らの間の対立を強調する一方で、新しい国民国家はいかなる共通の過去の観念も否定していた。90年代以来、最近の対立から過去に遡る対立の記憶は、集団的に忘れ去られようとしていた。その忘却は単一の国家を建設するために、WWIIの後にユーゴスラヴ社会に埋め込まれていたものであった。平行して、バルカン半島の諸国家の歴史は、奇妙なことに中間的な地域レベルをバイパスにしてヨーロッパとグローバルな歴史に直接リンクされてきた。

これらのバルカン半島の現実、人々に次のように思わせてきた。つまり地域の共通した歴史究明の試みは、異民族間の競争および反感を和らげ、調和した共存および共通の将

来をもたらすかも知れない。共通の歴史の考え方は第1に地域史に、さらに個々の国家史一すなわち少数者の統合も含めて一に言及した。

3.5. 合同歴史プロジェクト

したがって、新しいバルカン半島のコミュニティの考え方は、新しい攻撃的かつ防衛的ナショナリズムへの平衡力・抑制力として出現した。合同歴史プロジェクト(JHP)一それは南東ヨーロッパ民主主義と和解のセンター(CDRSEE) という NGOによって1998年に開始されたもの一は主にスロヴェニアからキプロスまでのすべての南東ヨーロッパ諸国の共通史を執筆し、教育するための可能性の調査を主要な目的とした。

合同歴史プロジェクトはバルカン半島の歴史家の団体((歴史教育委員会 HEC)によって導かれた。私はその主任の名誉に与った。実際に、HECは17人のメンバーで、3つの学校レベルの歴史教師であり南東ヨーロッパ諸国のすべてを代表した。

私たちの視点では、もちろん地域の共通史を強調することであった。しかし、この新しい歴史は従来の諸国家史を新しい構築物で置き換えらるものではなかった。それは、むしろ、共通のバルカン半島の文化的かつ制度上の遺産に基づいて各国家の過去を新しく解釈することだった。その上、各国家史は独自にすべてのバルカン半島の国々で教えられ続けるだろうし、それを廃止しようとするのは空想的事実を我々は認識していた。従って、どんな革新的な試みも各国家史を統合するか、あるいは少なくとも、それと両立できるものにするべきであった。この種の革新は、内容の変化が方法の変化に平行するべきであることを意味する。実は、教科書の修正は一少なくとも排他的に一内容の変更を意味するのではなく、新しい技術、能力、応用知識などの開発を意味している。

プロジェクトの第1段階中(1999-2000)で、私たちは、この地域のすべての国の歴史教科書およびカリキュラムを分析した。また、歴史教育の状況も調査した。この仕事の結果は2つの出版物となった:

- ・ 『南東ヨーロッパ史の教育』(2001)
- ・ 『バルカン諸国のクレイオー: 歴史教育の政治』(2002)。

JHPの第2段階は教員教育を目指した。2000年12月から2002年2月まで、バルカン戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、オスマン朝の衰退および国民国家の設立のようなすべてのカリキュラム中の共通の歴史上の問題を取り扱いながら、教員教育の5つの地方ワークショップが取り組まれた。

プロジェクトの3期目の間、私たちは、和解と地域安定の展望を目指す歴史教育のためのもさに具体法を示唆しようとした。私たちは、「現代の南東ヨーロッパ史の教育」というタイトルの下に4つのワークブックを作った。そしてこの地域のすべてのカリキュラムに含まれている4つの歴史上の期間を選んだ。

- ・ オスマン朝(1299-1922)
- ・ nations と states
- ・ バルカン戦争(1912-3)
- ・ 第二次世界大戦(1914-8)

4つのトピックはすべて近代・現代史に属し、この地域の人々が共存および対立によっ

て、多かれ少なかれ運命を共にした時期である。

これらのワークブックは、教室の中で使用される教科書の補足であり、教科書ではなく資料本である。その教育方法は相対的で、多角的視野を持っている。資料は1つの国や1つの民族に分類されないが、その起源に関わりなく、より大きな主題のユニットで統合されている。各イベントや場面や主題に対して、私たちは、異なる国家史から来る異なる様相および展望を提示している。その上、この地域の歴史は、ヨーロッパと世界歴史のより大きな相対的な状況に置かれるて考察される。

3.6. 歴史の修正に対する反発

しかしながら、国家史の何らかの修正に対する強い反発がすべての国で明示された。反応は単一ではなく、機関も識別できなかった。私が編集した4つのワークブックの例を主に参照して、これらの反応の主な範囲を簡潔に描いてみよう。これらのワークブック—それらは異なる国々からの歴史家による多角的展望 *multiperspectivity* と共同作業に基づいた地域史への斬新なアプローチを示唆したもの—は、主としてセルビア、ギリシアおよびコソボで猛烈な反発を引き起こした。

a. 外国人の共謀

これらの反発の最初はいわゆる「陰謀説」だった。最近の十年間で、バルカン諸国への介入の長い経験によって、いわゆる列強、強力な「外国人」はこの地域の広く普及したステレオタイプで非難された。このステレオタイプは、共存する2つの様相である。第1に、植民主義者の政策と振る舞い、「遅れた」地方民を軽蔑することである。第2に、陰謀説であり、それによって地球のどこかの強力な人々がバルカン半島の人々を犠牲にして暗い計画を作り上げているとするものである。両方の場合、強力な外国人たちが、脅威の相手国家を未だに支援していると考えられている。最初のケースは、長い目録によって徹底的に分析された。そこではトドロヴァの著書『バルカン諸国を想像する』が顕著であり、バルカン半島への西欧の態度が東洋学のもう一つの視点と考えられている。(Todorova 1997)

陰謀説は、SEE 中の歴史教育の修正の場合に適用された。「すべての反発の中でも、共通の地方プロジェクトを成功裏に完了させることは超国家的陰謀の結果であると非難された。そしてその目的はかつてバルカンに存在した多民族国家の創造かあるいは復活を意図しているとするものである。クロアチアでは、これがユーゴスラビアの復活に結びつくに違いないという恐れが直ちにあった；セルビアでは、これは「兄弟愛と統一」の押しつけを意味するだろう。」一方ギリシアでは、これがオスマン朝の復活をもたらすに違いないという恐れがあった。(ストヤノビッチ、2007年)

ギリシアでは、主な議論は次のような点であった。つまり、米国、Sionist ロビーおよび多国籍企業から出るグローバルな政治的な計画(つまり共謀)が存在するという事実だった。それらは「バルカン半島の粉碎、すなわち新オスマントルコの下での彼らの統一」を意図した。その計画の成功によって、バルカン諸国が、アメリカのリーダーシップ、いわ

ゆる新体制の下で新しい帝国に再び征服されるように、バルカン半島のナショナル・アイデンティティーを崩壊させることが必要である。

この理論によれば、ギリシアの「若い」歴史家たちは、自らの研究によってギリシアのナショナル・アイデンティティーを崩しながら、一方、大学では支配集団を組織しつつ、これらの国際的な計画に共同参画している。実際に、2 グループの歴史家と歴史編纂の 2 つの流派との間の相違は、この討論において強い影響力を持った。私たちは、最初のグループを「伝統的」で「保守的」と呼び、そして第 2 のグループを「若い」また「革新者」と呼んで良いと思う。「若い」歴史家とは、歴史学の国際的レベルに従って、歴史編集法への新しいアプローチを伴っている歴史家と定義してもよい。

b. 「若い」歴史家に対する旧来の歴史家

グループは共通の特徴を保持するだけでなく、政治情勢や学術的な伝統に規定されて、国毎に多様である。保守的な歴史家が反応する理由は、幾つかの事例では、彼らの名声がより若い歴史家によって危険にさらされていることによるものである。

他方では、「若い」歴史家の姿勢は単一ではない。彼らは従来の国家主義的歴史の修正プロジェクトに参加するが、彼らはこの修正の政策的範囲に懐疑的である。マリア・トドロヴァを例に挙げてみよう：「先例がない現代のレトリックを評価する場合、特にユーゴスラビアの NATO による爆撃の余波で、肯定的な南東のヨーロッパのアイデンティティーを構築することが求められる中で、これらの要請の後ろにある政治的な動機を注視すること、同様にプロジェクトの政治的・文化的コストも考慮する必要がある。結局、アイデンティティ・ポリティックスは、他の種類の政治と同様に社会統制であり、政治的動員である。」(Todorova 2004:10)

共通のバルカン半島史に関する限り、ちょうどヨーロッパ史の場合のように、歴史家たち次のように考えている。つまり、過去の共通の理想化された写真は必要ないこと、また歴史教育の手段によって新しいアイデンティティー、すなわち構築されたナショナル・アイデンティティーのモデルを基盤にしながらかつて共通のバルカン半島のアイデンティティーを構築する必要はないと考えている。要するに、古いアイデンティティーを越えるために新しいアイデンティティーの構築は必要ではなく、また古い国民的神話を越えるために新たな神話の構築は必要ではない。

結論

学校での歴史教育の修正が、対立と敵意を経験した国家の中に平和共存を準備することができるという広範囲の合意がある。この合意は世界中で一連の国際的、互恵的な計画を励起してきた。それらの計画はすべて、出発点として、将来の世代を戦争か平和のいずれかに準備する際に、教育が中心的な役割を果たすだろうという確信に基づいていた。

この一般的な原理は最近の 20 年間、特にユーゴスラビアの崩壊、およびボスニア、コソボおよびマケドニア共和国の武力紛争の苦しい経験の後に、南東ヨーロッパで適用された。南東ヨーロッパは未だナショナリズムから脱出できていない。全く逆である。ほとんどの

国々では、流動的な政治情勢は敵意の新たな爆発を内包する恐れをもち、満たされない国民の熱望は、避難と安心感を提供する国民意識 *national identity* に集結する。従って、国家史の修正は、ナショナル・アイデンティティーや国家の存在に対する脅威と見なされる。この脅威は単に外的かもしれない。「私たちの」歴史を書いている「他者」は、米国、ヨーロッパ、強い隣人、従来 of 国家の敵、民族国家内の多数派かもしれない。

私たちがこれまでに示してきたような諸反発にもかかわらず、多くの国々では、その地域の結合と統一を達成するために歴史教育の修正を目指して励む若い歴史家および教師の核ができつつある。私たちがどのように書き、歴史をどのように教えるかは、これからの私たちのビジョンに依存していることは、明白である。EU の統合は、この地域に新しい展望を提示した。それは歴史教育の分野でも有効なものだ。

References

- Brunnbauer 2004: Ulf Brunnbauer (ed.), *(Re) Writing History: Historiography in Southeast Europe after Socialism*, Münster: LIT Verlag.
- ICB 2005: International Commission on the Balkans, *The Balkans in Europe's Future*, [2005].
- Koulouri 2002: Christina Koulouri (ed.), *Clio in the Balkans. The Politics of History Education*, Thessaloniki: CDRSEE.
- Lafontaine-Schwarz 2005: Marie Lafontaine-Schwarz, *Peace Education in South Eastern Europe: The Enhanced Graz Process*, PSIO Occasional Paper 1/2005.
- Lampe 2006: John R. Lampe, *Balkans into Southeastern Europe. A Century of War and Transition*, London: Palgrave.
- Pingel 1999: Falk Pingel, *UNESCO Guidebook on Textbook Research and Textbook Revision*, Hannover: Verlag Hahnsche Buchhandlung.
- Pok, Rüsen, Scherrer 2002: Attila Pok, Jörk Rüsen, Jutta Scherrer (eds.), *European History: Challenge for a Common Future*, Körber-Stiftung, Hamburg.
- Siani-Davies 2007: Peter Siani-Davies (ed.), *International Intervention in the Balkans since 1995*, London: Routledge.
- Stobart 1999: Maitland Stobart, "Fifty years of European co-operation on history textbooks: The role and contribution of the Council of Europe", *Internationale Schulbuchforschung* 21 (1999), p. 147-161.
- Stojanovic, 2007: D. Stojanovic, *Balkan History Workbooks - Consequences and Experiences*, unpublished paper.
- Todorova 1997: M. Todorova, *Imagining the Balkans*, Oxford: Oxford University Press.
- Todorova 2004: Maria Todorova, "Introduction. Learning memory, remembering identity", in idem (ed.), *Balkan Identities. Nation and Memory*, London: Hurst and Company.

(田中暢子訳)